

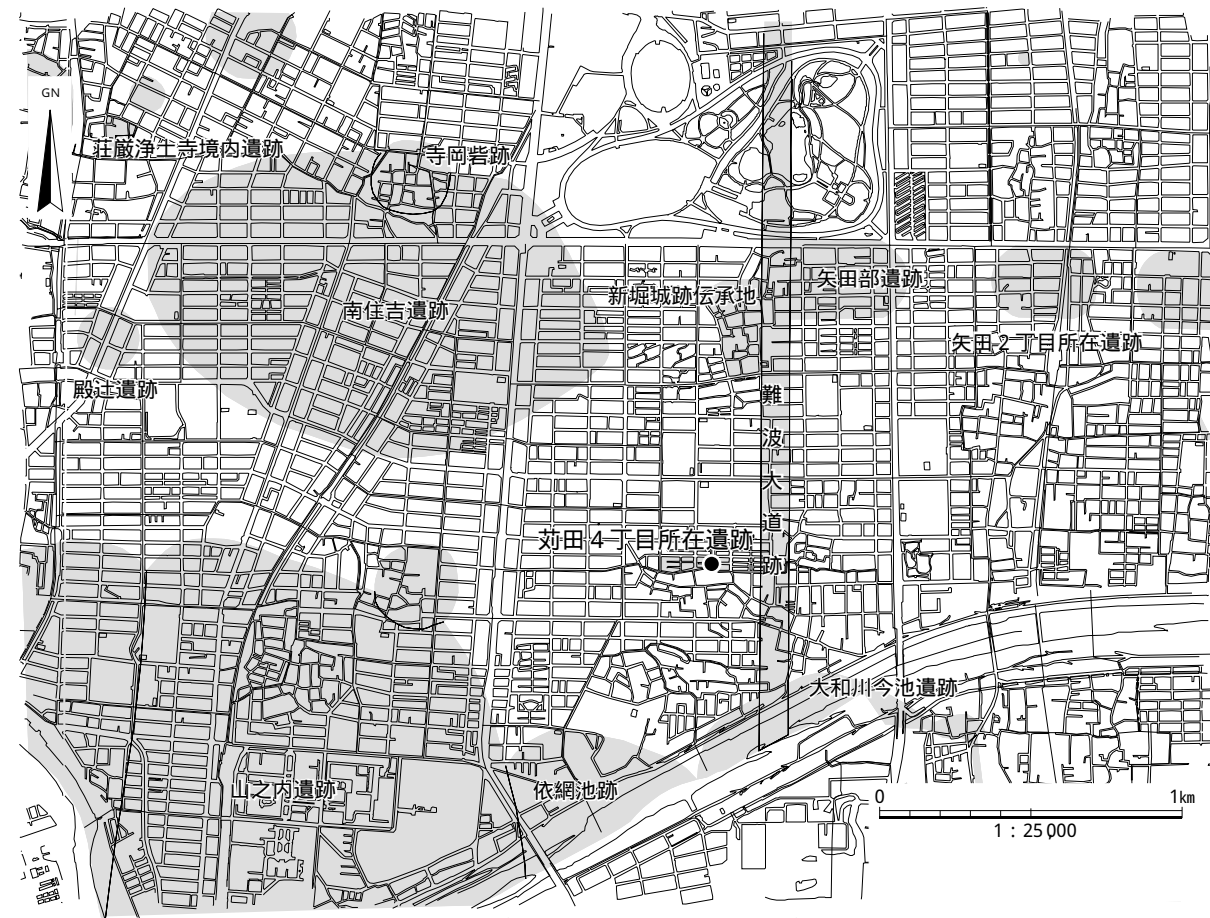
苅田4丁目所在遺跡(KL06 - 1)現地見学会資料

2006年8月31日(木)
財団法人 大阪市文化財協会

苅田4丁目所在遺跡とは？

2001年新たに発見された中世～近世の遺跡です。遺跡の東には難波京朱雀大路から南へ続く古代の道難波大道なにわだいどうがあったと推定されており、西には旧石器時代～江戸時代の複合遺跡である山之内遺跡や南住吉遺跡があります。この地は、古代より歴史的に重要な場所だったといえます。

2002年に西隣の敷地で行った調査では、中世(室町時代：14～15世紀)の鋳物に関する遺構や遺物がたくさん見つかりました。古文書の研究によって、ここ「かつた(苅田)村」のほか、近所の複数の村に鋳物作りを専業とする人たち「鋳物師いもじ」がいたことが推定されていたのですが、発掘調査によって、この地に「苅田鋳物師」が存在したことがより確実視されるようになったのです。付近では、山之内遺跡でも同様な鋳物に関連する遺構・遺物が報告されており、「我孫子鋳物師」に当たるのではないかとされています。ただし、前回の調査では鋳型や炉を作るための粘土を採掘した穴は100基も見つかりましたが、工房の跡やこれを区切る溝などは見つかりませんでした。その後の検討で、おもに鉄の鍋や犁先などを作っていたことが分かりました。



遺跡の位置と周辺の遺跡

今回の調査成果

今回の調査では、前回に比べて多くの遺構や遺物が見つかり、大きな成果が得られました。調査はまだ終了していませんが、これまでで分かっている概要について述べます。

・江戸時代

田畑の畝間溝がたくさん見つかりました。東西方向の溝が多く、南北方向のものも少ないながら見つかりました。溝の底では牛の足跡や鋤の跡が見られました。東側の調査区では、井戸が2基ありました。これらからは17～19世紀にかけての陶磁器や瓦がでてきました。調査区の南側にはひょうたん形の池がありました。池は府営住宅の建設直前に埋め立てられたようです。

・中世

東西の調査区で見つかった南北・東西方向の2本の溝の東と南側で、鋳物に関する遺構がたくさん見つかりました。溝は村あるいは工房を画していたと思われます。区画の中は東側の調査区で見つかった規模の小さな南北方向の溝で区切られていたようです。この東側では井戸が確認されました。鋳物に関する遺構の多くは使い物にならなくなった炉や鋳型、炉の支脚、炉に空気を送り込むふいごの羽口などのごみを捨てた大小の穴です。穴の形もさまざま、丸いものや四角いものがあります。なかには周辺に小さな柱穴を配置した浅い穴もあります。このような穴の上には掘立小屋のような施設があったのかもしれませんが。前回の調査で見つかったような小さな穴は、大溝よりも西すなわち前回の調査区側に分布しています。また、少し時期は新しくなりますが、大溝の外側ではさらに規模の大きな堀状の遺構が見つかりました。

遺物は、溝やごみ捨て穴から鋳物作業に使われたものとその廃棄物(炉壁・鋳型・支脚・羽口・鉋滓)のほか、土器の羽釜・碗・皿、中国製青磁・青花、瓦が見つかりました。その時期はおおよそ13世紀～16世紀(鎌倉～室町時代)で、14～15世紀(室町時代)が中心となるようです。

・古代

前回の調査時よりも多くの遺物が見つかりました。奈良時代ごろの須恵器や土師器と呼ばれる器のほか、土錘(漁網の錘)があります。現在、遺構があるか確認作業をしています。

発掘調査の意義

今回の調査では、大きな溝で区切られた中に、鋳物に関連する遺構が密集することが明らかになりました。通常、村の真ん中で火の気を使うとは考えられませんので、今回の調査地は村か工房の北端に当り、溝はその周囲を画するものだったのかもしれませんが。肝心の鋳物工房があったかどうかまではいまのところ分かっていませんが、遺構の分布状況からは少なくとも工房の中心はさらに南であったことが窺えます。また、大溝が埋まった後に掘られた大規模な遺構は堀と呼べるほどのものです。戦乱の激しかった中世後半、周辺の村では防御のために環濠を巡らすことが行われました。この遺構が環濠であるならば、ここは村の北東隅だったのでしょうか。

今後は、鋳造に関連する遺構をさらに詳しく調べながら、まわりに巡らされた溝のつながり、さらに出土した遺物の時期をあわせて、「かつた村」の往時の姿を探っていく予定です。

